
戦えラブレンジャー

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦えラブレンジャー

【Nコード】

N8568C

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

戦隊物好きの彼女、映美に振り回されて、疲れきっている俺。普通の恋人同士に憧れる俺の前に、分岐点らしきものが。どう転んでもろくなことになら無そうな事に翻弄されていますます疲れきる話。

プロローグ（前書き）

んー、タイトルは仮です。

書き上がったら、変わります。

中身も、ある日突然大幅に変わるかもしれません。

プロローグ

フレイム・レッドはボルカノン・スラッシャーを振りかぶり、アブラーム男爵に切りかかった。

「ふはは、未熟なり」

アブラーム男爵は腰に下げたサーベルを抜き放ち、フレイム・レッドの渾身の一振りを受け止めた。

「貴様一人で我輩に勝てると思うなよ！！」

アブラーム男爵の言葉通り、鏢迫り合いの状態からジワリジワリとフレイム・レッドの体が押されていく。

「くうっ」

どうにか踏み堪えるフレイム・レッドだが、劣勢は誰の目にも明らかだった。

「未熟、あまりにも未熟だぞ、炎の騎士よ。これ以上私を失望させるまえに、あの世に送ってやるわ！！」

その言葉と同時に、男爵の膝がレッドの腹部にめり込んだ。

「ぐあっ」

呻き、多々良を踏んで後退するレッド。その胸元に男爵がサーベルで切りつける。走る炸裂音、精霊の加護を受けた特殊スーツに火花が走る。

「とどめだー」

男爵がサーベルを振り上げた瞬間だった。

「スプレッド・シャボン」

大量の泡が男爵の周囲にまとわりつき、次々と破裂した。

「ぐわあ、何だと」

思わずよろめく男爵。レッドが見上げたその先には、凜と立つ四人の精霊騎士の姿があった。

「レッド、大丈夫？」

叫んだのは青の騎士。母なる水の騎士、アクア・ブルーだ。

「みんなー!!」

「悪いな、遅くなったぜ」

いかにもお調子者らしい黄色の騎士。空駆ける風の騎士、ウィンド・イエロー。

「何とか間に合ったみたいね、ブラック」

温かみを感じさせる柔らかな声の白の騎士。包み込む光の騎士、フラッシュ・ホワイト。

「我を従えるリーダーならば当然だ」

どこか冷たさを感じさせる黒の騎士。飲み込む闇の騎士、ダークネス・ブラック。

「馬鹿な、アリッサとゴルゴームに足止めさせたはずだ!」

男爵の慌てる声。

「あんなの、どうってこと無いんだから」

とブルーが言えば、イエローもそれに続く。

「蹴散らしてやったぜ」

四人は次々とレッドの傍らに駆け寄ってきた。

「どうやら、形勢逆転ですね」

「諦める、男爵。我々が来たからには、そうそうやられはしない」

一度はデモンゲートに組したホワイトとブラックも、洗脳の解けた今は地球を愛する騎士の一員だ。

「おのれ、精霊の騎士ども、覚えている」

悔しげに男爵は捨て台詞を残し、空中へと姿を消した。

しかし、安心したのもつかの間。男爵と入れ替わるように現れる巨大な影。先ほど倒したゴルゴームがベヘリットの魔力により、巨大化して蘇ったのだ。

「ちえっ、相変わらずしぶといやつだぜ」

イエローは天を見上げ、それでも余裕を見せていた。

「よし、精霊機を呼ぶぞ」

レッドの声で、他の四人もそれぞれの武器を天に掲げる。

『いでよ、精霊機!』

その一

「おおー、いよいよだー」

俺の部屋に響く能天気な声。俺の睡眠を妨げる声は、最早騒音だ。狭いワンルームマンションだから、どうしても耳に入ってくる。日曜の朝っぱらからこんな声を上げるやつを俺は一人しか知らない。

「うるせえぞ、映美!!」

俺は眠い目を擦りつつ、布団の中から怒鳴りつけた。

「合体、精霊王エレ・キングー」

聞こえていないかのようににはしやぎ続ける映美。

俺は布団の上で上半身だけ起こした。視線の先にはTシャツとパンツというあられもない姿でテレビに噛り付いている小柄な娘。起き抜けそのままの姿でテレビをつけたらしく、伸びた髪はばさばさだ。なんて色気の無い姿だろうか。起き上がった俺に気付いていないかのごとく、画面に映っている特撮のロボットに見入っている。

夏樹映美。俺の彼女だ。

映美とは付き合い始めて彼是一年半になる。結婚はしていないけど、二ヶ月ほど前から映美はうちで暮らし始めた。誘ってみたらあっさり快諾してくれた。けど、そのときにはこんな習慣があるなんて、一言も言わなかったから、そのときにはこれから彼女と一緒にいられるかと思うと幸せなどを噛み締めてみたりしたものだ。

でも、その幸せに純粹に浸っていられたのは、最初の日曜日が来るまでの間だけだった。毎週日曜日、朝から大騒ぎされるなんて、全く持って想定外のイベントだった。もちろん、彼女が戦隊物好きなのは知っていた。けど、まさか毎週律儀に早起きしてみているとは思いつかなかった。日曜日にデートするといっても、待ち合わせは大体昼前だ。それより前に彼女が家で何をしていたかなんて、まるで知らない。

「精霊剣、エレガント・スマツシュ、どっかーん」

必殺技が決まったらしい。擬音まで一緒に言わなくて良いと思う。ちなみに、俺も映美も三十のほうに近い年で、更に言えば映美は一歳年上なのだ。初めて俺たち二人を見る人は、絶対に映美を年下だと思っただろう。背も低いし、痩せ型だから本当に小さく見える。どちらかといえば童顔で、あまり化粧気もない。若く、というより幼く見えてしまっらしい。時々俺ですら疑いたくなるのだが、年上なのは紛れも無い事実である。

「うるせえよ」

布団から片足を出し、映美の背中に軽く蹴りを入れる。

「あ、祐君、おはよ」

それで気付いたとばかりに振り返る映美。その前の呼びかけは完全スルーですか。

「今、何時だと思っただよ」

「えーと、エレメント・ファイブがもうすぐ終わるから、七時半ぐらい？」

彼女の判断基準の中央は、常に日曜日の朝七時がある。それがおかしいと思うのは、きっと俺だけじゃないだろう。

「そうだよな。で、昨日俺たちは二時半ぐらいまで起きていたわけだ」

「そうだね」

「眠いよな？普通」

「あたし平気」

くっ、見た目だけでなく体力もちびつ子並とはな。一刀両断の勢いで切り替えてきた映美に、俺は言葉を失ってしまった。テレビ画面ではエンディングのスタッフロールが流れ始めている。俺の話に区切りがついたと思ったのか、映美の意識は既にそちらに向いてしまっていた。

エレメントだかフィラメントだか知らないが、日曜の朝からこの手の番組を流すのはやめて欲しい。少なくともここに一名、それで

明らかに健康を害している男がいることを、テレビ局は真摯に受け止めるべきだ。

「あー、くそ、目が覚めた」

眠ることも出来なくなつた俺は、イラつく気分を抱えたまま布団から出た。ふと窓の外を眺めると、どうやらいい天気のようにだった。まったく、日曜日ぐらいゆっくり寝たいものだ。

「どこいくの？」

次回予告が終わつたらしい、テレビを消した映美が俺に話しかけてきた。特撮は好きだが、この後にやっている女の子向けのアニメにはまるで興味が無いらしい。

「風呂。目覚ましのシャワーを浴びてくる」

「あたしも後で入ろうっと」

そう言いながら映美は布団の上にごろんと転がった。テレビを見終わつて集中力が切れたのか、小さくあくびもしている。うむむ、どこからどう見てもちびっ子だ。

おまけのようにしているユニットバスは、作りも安っぽく、何より狭い。外国の映画なんかだと、もっと広い空間に一緒についていたりはするようだが、便器と浴槽の距離感の無さはどうだろう。湯船につきりながら便所掃除だつて出来る。しないけど。それでも熱い湯が出ることには変わらない。俺は蛇口を捻り、シャワーから出てくる熱めのお湯に体をさらした。緩慢だつた血液が急速に体を駆け巡る。朝はこれでなくっちゃな。

風呂場から出ると、映美は寝転がつたままで外を見ていた。

「おーい、出たぞ」

「はい」

返事はしたものの、外を見たままの映美。なかなか可愛いじゃないか。そう思ってみていると、映美は突然跳ね起きて俺のほうを見た。

「今日、五月の何日だった？」

「十二日だろう」

カレンダーを見て俺が答えてやると、一瞬考えた素振りを見せた後映美は口を開いた。

「ねえねえ、お出かけしようよ」

「ビデオ屋？開くのは十時からだぞ？」

いつものことだろうと高を括ってそう言つと、映美は頬を膨らませて抗議の声を上げた。

「違うよ。ドライブに行きたいの」

おお……神よ。付き合い始めて半年。こんな素敵なデートプランが彼女の口から飛び出してくるとは。普通じゃんとか思う無かれ。

今まで彼女の口から飛び出してきた企画といえればひどいものだった。

「ねえ、昔の戦隊物のビデオを借りてきて、鑑賞会しようよ」

「エレメント・ファイブの格ゲーが出てたから、買いに行こうよ」

「今日からエレメント・ファイブの劇場版が公開なんだ。見に行こうよ」

借りるビデオを店員さんに差し出すのは俺。映画館の窓口で「エレメント・ファイブ、大人二枚」といったのも俺。そんな暮らした。ピリオドを打つ日が来たかと思うと、感涙に咽んでしまいそうだった。

「おう、いい天気だしな。よし、善は急げだ。早くシャワーを浴びておいで」

「はい。バスタオル借りるよ」

そう言つて慣れた仕草でタンスからバスタオルと下着をとりだし、それらを併せ持って立ち上がる映美。風呂場に向かう映美の後姿を見ながら、俺はしばらく感動の余韻に浸ることにした。

その二

それから三十分ほどで映美の支度も整った。こういうときは、化粧気の無さとかがありがたい。

春も半ばとあって気温も高くなってきた。空は青く晴れ渡り、気持ちの良い日だ。気分が清々しいだけで、空の見え方も違ってくる。「で、どこに行きたいんだ？」

「京都」

迷うことなく返事する映美。二時間もあれば京都には辿り着く。時間が早いので手ごろな距離といえよう。グッドアイデアではないか。

「よし、じゃあ出発するぜ」

「おー」

愛車の青い軽自動車に乗り込み、勢い良くエンジンキーを回す。心地よい振動が体を震わせ、それと同時に流れ出すドライブに最適のポップス。しかし、そのイントロが終わるよりも早く、映美の手がイジエクトボタンを押していた。

「こんな曲、きらいー」

その役割を十分の一も果たすことなく吐き出された銀色の円盤。虹色に輝く盤面が少し寂しげだ。片手にそれを持ったまま、慣れた手つきでダッシュボードを開けて赤色のCDケースを取り出した。映美の持ち込んだ物で、中には当然特撮のCDがわんさか入っている。何枚か綴られている中から映美は一枚取り出してスリットに差し込んだ。俺のCDは代わりに開いたスペースに収められ、ケースもダッシュボードの中に戻された。

スピーカーから流れ出したのは、先ほどよりもテンポの速いメロディ。確か車を題材にした戦隊物の主題歌だったと思う。

「よおし、改めてしゅっぱーっ」

映美の号令。やや盛り下がった気分では「おー」と相槌を打ち、

アクセルを踏み込んだ。

映美の差し込んだCDは、主題歌集ではなく、サウンドトラックの類だったようで、ビデオで見せられたときには流れなかった曲も多数入っていた。映美はその全てを口ずさんでいる。ここまで来ると、一瞬凄いなと思わせる部分まで出てくる。

俺と彼女が知り合ったのは、一昨年。母校の大学祭に言ったときのことだった。後輩からの連絡で、ゲストに俺の好きな漫才師が来る、ということであれは久しぶりに母校の土を踏んだ。そんなに大きな大学ではないが、大学祭ともなればかなりの活気が出る。後輩は出店する側に回っていたが、俺はその店を開いているクラブとは直接面識も無く、従って時間になるまでは適当にぶらついているしかなかった。

「おにいさーん、焼きソバはいかがですか？」

暇を持て余す俺に声を掛けてきたのが映美だった。

カジュアルなトレーナーにエプロンと三角巾を付け、足元はジーンズとスニーカー。小柄で幼げな顔つきの彼女は、どう見ても大学生には見えなかった。最初はお姉さんが大学にでもいて、手伝いに借り出されているのだろうと思っていた。女子大生と知り合うのもいいかもしれないという考えが頭を過ぎったので、俺は頂くことにしたのだ。

「ああ、いいよ。貰うよ」

快くそう言っつて、ついでになっつこりと笑ってみる。それを見た映美は少しだけ不愉快な顔をした。それに違和感を感じつつ、発した次の言葉がいけなかった。

「休みの日に手伝いなんてご苦労様。お姉ちゃんでもいるの？」

「は？あたし、ここのOGですけど？」

俺の質問に対して、不快感を顔全体で表しながら映美はそういった。もはや笑顔に戻そうともせず、刺剥き出し。

「まさか、だっつてどう見ても・・・」

女子高生といいかけたが、映美の視線があまりに鋭利で俺は口をつぐんだ。俺の不用意な一言のために非常に険しい空気が漂う。どうにか謝ろうと考えたが、声を掛けることすらためらわれる空気になってしまっていた。

やがて立ち並ぶ露店のなかの一つに案内された。

「由香ちゃんお客さん」

映美は鉄板の向こうで焼きソバを作っていた女の子に声を掛けた。

「あ、映美さん、ありがとうございます」

「さん」付けの上に丁寧語。映美は勝ち誇ったように僕に視線を送り、それからまた客引きにしろつか、立ち去ってしまった。

「いらつしゃいませー」

由香と呼ばれていた女の子が僕に微笑みかけた。

「あ、焼きソバ一つ」

「はい、ありがとうございます。ドリンク、百円で付けられますけど?」

セット販売作戦だ。さすがは大学生。この強かさは侮れぬ。とはいえ、確かにドリンクがあったほうが食べやすいかもしれない。プラのパックに入れられた焼きソバはどう見てもうまそうには見えなかった。

「あ、じゃあ付けて」

「ありがとうございます。ここから選んでくださいね」

差し出されたのはダンボールにパソコンで打ち出したメニューを貼り付けた板だった。油がはねてよれよれになっている。

「んじゃあ、ウーロン茶」

「はい、少々お待ちくださいね。ウーロン茶一つお願いします」

ドリンクのケースの前にいた青年に由香ちゃんはそう呼びかけた。青年は「はい」といい、プラのコップにケースから取り出したウーロン茶を注いでいく。それを待っている間に俺は由香ちゃんとやらの話しかけてみた。

「ここは、どのサークル?」

「映像研究会ですよ」

映像研究会、聞いたことが無い。まあ、分けのわからないサークルが群雄割拠しているのは大学の常識だ。多分、全てのサークルを知っている人間なんていないと思う。

「さっきの人は」

「ああ、映美さん。OGの人で手伝って貰っているんです。好みですか？フリーらしいですよ」

由香ちゃんはこういう話が好きそうだった。なんとも言えず、曖昧に笑ってしまう。

「最初、高校生が手伝いに来ているのかと思って、失礼なこと言っちゃったよ」

「ああ、本人も結構気にしているみたいですよ。それでツンケンしてたんだ。映美さん、あ、夏樹さんて苗字なんですけど。あの人結構人懐こいところがあって、わりと愛想は良いんですね。あんな見てくれですけど、特撮の知識とか多分サークルでかなう人いないんじゃないかな」

よほどおしゃべりに飢えていたのか、それともこういう性格なのか、由香ちゃんは聞いてもいないことをぺらぺらと喋ってくれる。

喋っている間にも手は器用に動き続けていることが見ていて面白かった。ちなみにこの話を聞いたとき、俺は「特撮技術」いわゆるSFXに詳しい女の子だと理解していた。まあ、確かにそっちのほうも詳しかったんだけれども。彼女が言う知識とは特撮番組の知識だったわけだ。この後映美に無警戒に近づくことになったきっかけはこの辺の誤解もあった。

「悪いことしちゃったなあ」

「あはは、映美さんは怒ると怖いですよー。ちゃんと謝っておいてくださいね。はい、ウーロン茶」

「ああ、どうも」

「ありがとうございまーす」

元気の良い由香ちゃんに見送られ、俺はその場を離れた。席を探

しがてら、さっきのことを謝ろうと映美さんを探したが、結局このときは見つけれなかった。ちなみに焼きそばは案の定不味かった。

この後、後輩と合流してミニライブを満喫した俺は、例もかねて後輩を食事に誘ってみた。

「いやー、この後、店のほうの打ち上げがあるんですよ。一応顔を出しとかないと不味いんで、良かったら先輩がこっちに来ませんか」
逆に誘われてしまったが、それは丁重にお断りした。人間が密集する場所は好きじゃない。面識もないし。

それで後輩と別れた俺は、仕方なく速やかに撤収の事となった。車を止めたパーキングまで、最後の名残に大学を通り抜けていくことにした。ブラブラと歩いていた俺の視界に、さっき知った顔が飛び込んできた。映美だった。俺は最後のチャンスとばかりに声を大にして呼びかけた。

「映美さーん」

当然振り向き、そして呼びかけたのが俺だと知ると、ちょっと嫌な顔をした。そりゃそうだ。それでもとにかく俺は謝っておきたかった。立ち止まってくれたので、小走りで映美に近づく。

「何？何であたしの名前を知ってるの？ストーリーカー？」

接客モードも終わった彼女は非常につつけんだった。

「いや、あのカウンターの子に聞いたんだ。一言謝りたくて」

「由香ちゃんめ・・・、おしゃべりね」

やはり、あの子はお喋りだったか。それはいい。

「さっきは失礼なことを言ってごめん。知らない事とはいえ、悪かった」

僕は素直に頭を下げた。頭を上げると、まだ疑わしげではあったが、若干和らいだ映美の顔があった。

「まあ、見ての通りちっちゃいし、そういわれても仕方ないんだけどね。よく言われるし。老けて見えるよりはマシかもね」

「もし良かったら、お詫びに食事でもどう？」

今にして思えば、完全な軟派だ。しかもあんまり上手くない。

「えっ……」

一瞬戸惑った声を上げた映美。何となく可愛いと思ってしまったのが始まりだった。

「駄目かな？俺も夕飯を食べに行くところだったんだけど、一人じや寂しいし」

しばらくの間があつて、それから映美が口を開いた。

「そうね、まあ悪いやつじゃ無さそうだし、暇だから別にいいけど、薄暗くなってきたせいでこのときは気付かなかつたけど、映美は相当焦っていたらしい。軟派なんて生まれて始めての経験だったそうだ。どうりでホイホイついて来た訳だ。」

その三

その後、食事の席で何となく気があって、二回目のデートで僕のほうから付き合ってくれと切り出した。その時まで、彼女は戦隊物の話なんてまるでしなかった。映画の話は沢山したけど。

付き合いだして、彼女の愛する特撮の真の意味を知り、ビックリしたものだ。

今はもうすっかり慣れたし、別にそんなことで分かれようとは思わない。でも、今でも戦隊物は好きじゃないし、ちよつとは控えるよと思うときもある。あの時一言でも聞いていたら、どうだったろうか。ふと、そんなことを考えた。

車は高速に入り、単調な道が続いていた。車も然程多くなく、運転は快適そのもの。CDも二週目に突入し、もう一度主題歌が流れている。

「……騙されたのかなあ」

ふと、そんな呟きが僕の口から飛び出した。

「何が？」

てつきりトランス状態に入っているだろうと思っていた映美だが、呟いた声を聞いていたらしい。

「なんでもないよ。そんなことより、京都に着いたらどこに行きたい？」

聞かれていると思わなかった俺は、慌てて話題をそらそうとした。しばらくは疑わしげにこちらを見ていた映美だったが、やがて諦めたのか小さく一つため息をついた。

「映画村」

確かに人気スポットの一つだが、時代劇が好きだったとは知らなかった。てつきり湯豆腐が食べたいとか、嵐山で豆腐アイスが食べたいとか、そんなことを言ってくるかと思っていたが……。

「わかった。駐車場もあるし、丁度いいかもしれない」

「うん、楽しみだね」

映美はこのほか可愛い笑顔で俺に笑いかけてくれた。

「きゃー、アブラム男爵、私をさらってー」

ちびっ子に混じって叫び声をあげる映美。男爵役の俳優も戸惑っているようだったが、速やかにスルーしていった。そりゃそうだろう。

「ちえ、さらわれなかった」

お約束どおりちびっ子がさらわれ、慥然とした表情を浮かべる映美。本当にこいつは馬鹿だと思う。

「残念だな。さらわれりや隣が静かになったのに」

ぼそりと呟く俺。すかさず映美の拳骨が飛んでくる。

「いてえな」

「きゃー、エレメント・ファイブ」

俺の抗議を無視してちびっ子と一緒に叫ぶ三十手前の成人女性。再び騒然となった会場の中で、俺は何となく痛み出した頭を抱えて深いため息をついていた。

会場を出る頃、俺はすっかり疲れ果てていた。隣を歩く映美はすっかりご満悦だ。

「かつこよかったね、生は」

「…ああ、そうだな」

映美の満面の笑顔を見ると、ついそう言ってしまっ

「あたしも地球とか守ってみたいな」

頭の悪いことを言い出す映美。それに対して突っ込む気力もわいてこない。

それから俺達二人は、俺の希望もあって桂川の袂を歩いていた。二人で手をつないで散歩するのは本当に幸せなのだが、映美のほうは目的を果たして満足したらしく、興味無さそうにときどき水面

に目をやつたりしている。

「あ、もうこんな時間だよ。早く帰らなきゃ」

せつかく幸せを満喫していたのに、突然映美がそんなことを言い出した。時計は三時半を指していた。

「なんだ、どうしたんだ？」

「今日は、『雨上がりの午後に』がある日だよ」

『雨上がりの午後に』は、いわゆるトレンドドラマの類だ。イケメンの若手俳優が主役をやっているとかで、チョット話題になっていた。

「あれ、そんなの見てたっけ？」

基本的に映美はそういう類の番組が嫌いだ。もともと、正義の名の下に悪をぶった切るような、分かりやすい番組ばかり見ているから、どろどろとした人間関係を見ていると、頭がこんがらがらしい。まあ、映美らしい理由だ。

「んーん、見てないよ」

「じゃあ、何で？」

ドラマを一話だけ見ることに何の意味があるのか。

「だから、こないだ言ったでしょ？」

「はあ……」

「パティエローがゲストで出るから見るよって言ったよ？」

ああ、頭からデリートされていました。どうでも良すぎて。怒ったように腕組みして僕を見上げる彼女はとても可愛いんだけど、これで普通の子だったらなあ。

ちなみに、パティエローとは、前年の戦隊物、パトレンジャーのイエローだ。中身は女の子で、ちょっと可愛らしかった。確か樹木希という女優が演じていた。水着のモデルで、雑誌のグラビアなどをやっていたそうだが、比較的演技は上手かったと思う。

「いい？パティエローは、戦隊物じゃ珍しく、イエローの女の子が売れるかもしれないっていう貴重なパターンなんだからね。要チエツクだよ？」

お願いだから、公衆の面前でそんなことを力説しないでくれ。俺は「はいはい」と映美の言葉を適当に流し、とにかくその場から離脱することにした。デート終了。

その四

帰り道。なんともいえない脱力感のおかげで、すっかり無口になった俺。さして気にも留めずにパトレンジャーのサウンドトラックに聞き入る映美。

「あ、そういえば、もうすぐ誕生日だよな」

映美が不意にそんなことを言った。そういえばそうだった。この年になるとそんなことは忘れそうになる。ちゃんと覚えていてくれたかと思うと、

「プレゼントさ、いろいろ考えたんだけど」

「うん」

「超合金DXエレ・キングでいいかな？」

「ああ、死んでも嫌だ」

それはお前の欲しいものだろうが。

「えー、なんでー」

「はっはっは、なんでだろうなあ」

本当にこつちが聞きたいわ。映美の不満そうな顔が本当にむかつく。

「だって、私の誕生日は十一月だよ？その頃には二体目、下手すれば三体目がでてるかも。祐君、一気に三体も買ってくれる？」

それは俺を説得しようとしているのか？それとも新手のジョークか？

「ね？だから、祐君の誕生日に、私がエレ・キングを買ってあげて私の誕生日に祐君が残りを買ってくれるってのがいいと思わない？」

結構な熱弁をありがとう。呆れたり空しかったりを通り越して、妙に可愛く見えてくるのはなぜなのやら。それはともかくとして、あんなでかいおもちゃを鎮座させる余裕はうちにはありませんよ？「思わない。大体、映美の誕生日だって服とかバッグとかアクセサリーとかいろいろ考えてるんだけど」

「そんなの合体しないじゃんか。いらない」

にべもない。どういう基準だ。世の中合体しないものの方が絶対多いぞ？大体、今の発言は初期戦隊物を迫害する発言じゃないのか？
「もつと、普通のものがいいよ」

「普通って何？ファイブ・アタッカーセット？」

それは普通なのか？ちなみにファイブ・アタッカーとは、エレメント・ファイブの面々が使う武器の総称である。映美は「俗に言うところの個人武器ってやつよ」と言っていた。そんなのが共通ワードになっている「俗」は嫌です。

「まあ、ほら、服とかさ、そんなの」

「うわ、詰まんないの。そもそも超合金じゃないし」

そうだね。そんなのいらないからね。

「なんで、お前はそんなに戦隊物が好きなの？女の子だったらさ、なんかほれ、そっち向けのアニメとかあったんじゃないの？」

「うーん、なんか盛り上がらないのよね」

「ふーん、戦隊物が好きになったきっかけは？」

そう聞いた途端、なぜか映美は少し恥ずかしそうな顔をした。何なんだ？ものすごく気になるじゃないか。

「聞きたい？」

「うん」

俺がきつぱりと頷くのを見て、映美にしては珍しく少し考えてから口を開いた。

「あれは、六歳ぐらいのときかな？うち、一つ上に兄貴がいてね。戦隊物が好きだったのよ」

まあ、七歳ぐらいならさもありなん。

「で、あるとき、兄貴が行くのに付き合っ、私もヒーローショーに行ったの。そしたら、私、さらわれちゃって」

ああ、今日もやってた子供を舞台上上げるってやつか。

「で、そこに颯爽と現れたのが、メタモル・ワイバーンだったのよ」
しだいにうつとりとした表情になってくる。ちなみに、メタモル・

ワイバーンとは、当時放映していた、第十代目の戦隊物「メタモルマン」のレッド的ポジションの戦士である。「メタモルマン」が一番好きだと聞いていたが、そういう舞台裏があったとは。

「もう、かつこよくってさ。お嬢さん、大丈夫だったかい？とか言ってくれてさ。まあ初恋よね。握手してもらって、写真も取って貰って…幸せだったわ」

ほほう。相手がそんな奴では、嫉妬心もわかないな。

「で、まあ、そっから嵌っちゃってね。兄貴は年とともに興味が薄れていったみたいなんだけど、私のほうは今もなおイケイケってわけよ」

なるほど。納得はしていないけど、理解はした。

「それは、そんなにテレながらいう話？」

「そりゃあ、初恋を告白するみたいなものだし。ほら、修学旅行の夜、みんなで恋話したときを思い出すって言うかさ。やっぱり恥ずかしいものがあるわけよ」

「十年以上経ってるのに？」

「おらあっ！！」

気合と共に彼女の右拳が俺の右頬に炸裂した。その拍子に車が蛇行してちよつとドキドキ。運転中はやめてください。

「死んで見る？」

「ごめんなさい」

素直が一番。やっぱり年の話でからかうときには場所を選ばないとね。

「とりあえず、そんなわけで私の愛の深さは分かってもらえたと思うわ」

「そうだな、確かに良くわかった」

「じゃあ、DXエレ・キングで良い？」

「嫌だ」

再び一刀両断。映美の頬がふぐのように膨れ上がる。

「なんでよ」

「だってほら、そんなに愛しているものをうちに置いていたら、嫉妬に狂った俺が窓から発進させてしまうかも知れないだろ？」

とか言ってみる。実際は本当に邪魔なだけなのだが。しかし、映美は真剣な表情でしはし悩んだあと、明暗が浮かんだとばかりに笑顔で顔を浮かべて言った。

「じゃあ、うちに置いとくから」

「そういうのはプレゼントとは言わない。しかも、それじゃあお前も遊べないだろう」

「つまらない」

助手席でじたばたするのはやめてください、危ないから。全く、このままじゃ家に無事に帰れるかどうかも分かったもんじゃない。映美をなだめながら、俺はため息が止まらなかった。

それから家に帰って、夕飯を食べながらドラマを見ることになった。

映美は家事の類がほぼさっぱり出来ないの、夕飯は俺が作る。ために一度作ってもらったことはあるが、それはもうむごたらしい結果に終わった。それ以来、俺も進んで家事にいそしんでいる。まさか本当に火が出るとは…。

「わーい、ハンバーグ」

はしゃぐ映美。子供か。

「いいからおとなしく食べ。ドラマが始まるぞ」

雨上がりの午後にながらという内容なのか、それすら二人とも知らない。どうやら不倫がらみの三角関係で、そこにヒロインに横恋慕する男が登場してみたりして適当にどろどろとしているようだった。樹木希は主人公の男の高校時代のクラスメイト役で出ていた。

「そつえばさ、この子演技は上手いよね」

「そりゃ、パティエローって意外と長いよ。メタモルマンにも子役のときに出てたでしょ？ほら、ワイバーンが先生やってた学校の教え子」

知りませんが。日本人の常識のように言うのは止して下さい。ワイバーンの普段の職業は、そういえば教師だったかな。

「まあ、それ以外はテレビの出演無かったし、グラビアとか出てたから、私も最初は気付かなかったけどね」

「ふーん」

そこで画面に樹木希が出てきたので、会話は中断になった。

樹木希と主人公は、同窓会で久しぶりに会って意気投合、そのまま飲みに行ったところをヒロインに見られて、主人公に幻滅したヒロインは実家に帰る。その途中で横恋慕している男に出会い、心の際に入り込まれたヒロインは、気づけば一夜を共にしているといたあらずじだ。

…いいのか、こんなんゴールデンに流して。

ちなみに、樹木希の演じる元クラスメイトは、状況が悪くなると見るや否や、すばやくステータアウトしていくという処置に困る役どころだった。まあ、ドラマの中で起こるハプニングの一環として登場しただけなのだろう。

「つまんないね」

同感だ。俺も頷いた。

「パトイエローも大したことない役だしね。もういいや」

「消す？」

「口直しになんか見よう。こんなときの祐君チョイスは何？」

珍しく俺に振ってきたか。とはいえ、彼女の好みには合わなければ修正されるだけの話なのだが。パターンから行くと、イエローが活躍している話がいんだよな。

「映美ちゃんDVDコレクションから…」

うんうん、と映美が頷く。映美ちゃんDVDコレクションとは、歴代戦隊物の中から、DVD化されたものを買集めたコレクションで、その量は半端じゃない。その中から特に気に入っているシリーズが俺の部屋のクローゼットの中に並べられているのだ。本人は陳列棚に整然と並べて欲しいらしいが、他の客が来たときにNGな

ので、クローゼットの中で我慢してもらっている。

「パトレンジャー、第40話。ナイトメア・ビジョンでどうでしょうか」

「よろしい。祐君も分かってきたねえ。私の教育の賜物よね」

そんなことを感慨深く言われても困るんだけど。確かにこの所すっかり彼女に馴染んできた感じは否めない。複雑な心境だ。

ちなみに第40話はパトイエローが主役の話だ。エリートでいつも冷静沈着な女刑事、と言う役所の彼女が、その非常なまでの冷静さの裏側にある過去のトラウマが明らかになる話だ。悪夢を操る敵の怪人に、その出来事を悪用され、執拗に苦しめられる中でそれを乗り越えると言う、ファンにはたまらない一話である。

「では、早速セットしてくれたまえ」

「ラジャ」

そんな感じで夜は更けていった。

その五

翌朝、カーテンを開けると、快晴だった。青い空から降り注ぐ日光が気持ちよさそうだ。それから愚図る映美をたたき起こし、朝食を作っている間にシャワーを浴びさせる。いつも思うことだが、こいつは本当に年上か？

今日の朝食は、スクランブルエッグと焼いたソーセージ。パンを焼いてコーヒーを入れて、我ながらよくできた。

そう思っていると、丁度バスルームから映美が出てきた。

「ふー、さっぱりしたよ」

バスタオル一枚というあられもない姿を惜しげもなく晒してくれる。始めのうちこそ喜んでいたけど、いまや慣れきってしまった。むしろ、慎めといたくなる。

「とつとと服着て飯食え」

「はい。あ、シャンプー切れたよ」

「買い置きあつたかなあ？」

「帰りに買つところか？」

「うん、頼むわ」

そんな会話をしつつ、とりあえず出勤への運びとなる。映美を適当な駅まで車で送って、そのまま自分も出勤。俺の勤める会社は辺鄙なところにあるので、車通勤が基本。対して映美の会社は街中にあるので、電車での通勤となる。大体同じ時間に終わるのだが、場所の関係上映美のほうが早く帰りついたりする。

「ついでにさ、晩飯の材料買つといて。何でもいいよ」

「分かった」

当然こんな会話も出てくるわけで、一人のときよりは断然便利になった。それにしても、こういう話をしているときは、普通の間違った感覚なんだけどなあ。

会社の隣にある専用の駐車場に車を止め、車内で軽く伸びをする。昨日の京都ドライブの疲労は意外と体に残っていた。まあ彼女は楽しんでいてくれたのだが、どうにも振り回された感が拭えない。ついでに軽く体を捻ってから車を降りると、聞きなれた声が耳に飛び込んできた。

「おはよう、西田君」

声を掛けてきたのは、同じ事務所で働く牧谷千恵美さんだった。俺よりも五年先輩で、人生でも同程度の先輩だ。少し茶色がかった髪を短く切り纏め、スーツをピシッと着こなしている。出来る女って感じた。

「おはようございます、牧谷さん」

「せっかく、いい天気なのに、なんか疲れているわね」

一目見るなりそんなことを言われてしまった。

「…分かりますか？」

「うん。目に生気が無い」

うーん、よろしくないな。俺は一つその場で深呼吸した。意識的に背筋を伸ばし、目に力を入れようとしてみる。

「うん、まあマシね。なんでそんなに疲れてるの？彼女と喧嘩でもしたのかな？」

牧谷さんは俺の彼女のことを知っている。一度繁華街でばったりと出会ってしまったのだ。出会っただけなので、中身までは知らないが。多分、可愛らしい年下の女の子とでも思っているんだろう。

「ほんと、羨ましいわよね、喧嘩する相手がいて」

最近出合いが無いらしく、牧谷さんは何かと絡んでくる。悪い人ではないのだが、特有のねちっこさと言うか、そういうのは苦手だ。こういうところが男を遠ざけているのではないかと思うのだが、そんなことは絶対に口にしない。怒らせると怖いのだ。精神的な面での攻撃力は、社内でもぴか一の腕前を持っている。

「まあ、喧嘩したってことはないです。上手くやってますけどね」
そういってお茶を濁しておいた。相談なんかした日には、話が長

くなつて止まらないのが目に見えている。

「ま、なんにせよ今日は一週間の始まりなんだから、あんまりぼんやりしてちゃ駄目よ?」

ぼんつと俺の肩を一つ叩いて、牧谷さんはそういった。

「ほら、後輩のお出ましよ。みつともないところを見せないようにね」

はいはい。心の中で適当に返事をしながら、牧谷さんの視線を追いかけてみる。俺を通り越して背後。振り返ると、一人の女の子が車から降りようとしていた。立花優梨子。俺の三つ年下で、一年後輩だ。

「立花さんか…」

「あら?何か不満?」

からかうような口調の牧谷さん。その突っ込みの意味が分からん。「いえ、別に」

手短にそう言うしておく。若干不満そうだったが、突っ込みどころが見当たらなかったのか、牧谷さんはそれ以上何も言わなかった。

「立花さん、おはよう」

こちらに歩いてくる立花さんに、片手を上げて挨拶する。立花さんは軽く会釈した後、足早にこちらに近づいてきた。

「あら、立花さんには元気な挨拶をするのね」

「後輩に恥ずかしいところを見せちゃ駄目なんですよ?」

牧谷さんのなじむような言葉に、俺はもう振り返ることもせず、言い捨てるようにそういった。その言い方にカチンと来たのか、牧谷さんは何も言わずに遠ざかっていった。敵にしたくはないが、限度はある。あの人に付き合っていては、何時まで経っても話が終わらない。

「おはようございます、西田さん」

そばまで来た立花さんは、改めてそう言うてぺこりとお辞儀をしてくれる。いまどきに珍しい黒髪は肩口で切りそろえられ、目元には縁無しの眼鏡。化粧気もあまりなく、全身から控えめな空気を出

している。

「ああ、おはよう」

「さっき、牧谷さんがいたみたいですけど…」

「ああ、どっかいった」

「はあ…」

困惑気味の立花さん。女性陣で牧谷さんに向かってこんなにもざい言葉を使う人はいないのかもしれない。

「ま、とりあえず俺達も行こうか。立ち話をしている遅刻とか、シヤレにならないしね」

「はい」

俺達は他愛のない話をしながら駐車場を出た。天気も良く、気温も暖かい。仕事したくないなあ、と言うのは本音。

その六

会社は四階建てのクリーム色のビルで、この周辺じゃ比較的背の高い建物だ。屋上に看板が建ててあって、「高村商事株式会社」と書かれている。

別に工場があるとかいうわけではなく、どうしてこんな田舎にあるのかは謎。就職活動がさっぱりうまくいかず、困り果てているときに拾ってくれたところだから感謝はしているが、本音を言うともっと通勤が楽なところに勤めたいと思う。まあ、然程大きい会社ではないので、比較のアットホームな雰囲気は過ごしやすかったりもするのだが……。

会社に入ると、女性人は事務服に着替えるのに一度更衣室に行ってしまう。それは立花さんも例外ではなく、俺達は会社の一階で分かれた。俺はそのままエレベーターに乗り、二階にある自分のフロアを目指す。

「おはようございまーす」

そういいながら事務所に入ると、既に何人かは先に来ていて、そういう人たちが一応挨拶を返してくれる。なんとなくやっている朝のお約束に等しいものなので、誰に挨拶して、誰が聞いていないとかはチェックしない。

「あれ？」

机の上に書類の束が置いてあった。A4用紙で十枚ぐらいだろうか。一番上にはメモが載っており、「会議の議事録まとめとして、十時まで 牧」と書いてあった。斜向かいに座る牧谷さんに視線を送ると、ちらりとこちらを見て、一瞬意地の悪い笑顔を見せた。朝からやってくれる……。生意気な後輩に天罰と言うわけか。神気取りも大概にしろと言いたいが、同じ部署での先輩後輩に当たるわけだから、仕事を割り振られるのも当然だ。この「十時まで」とかいう括りがなければ、普通の仕事だし。てゆーか、ビルに入ってから、

これをここに置くまでが早すぎませんか？ベテランの技？

とりあえずパソコンの電源を入れ、立ち上がるまでに書類に目を通す。出ていない会議の議事録は、本当に読んでいてもつまらないというか、理解できない。とりあえず、要点だけ拾い上げてまとめしておくか。そう思っているところに、立花さんが入ってきた。

「おはようございます」

丁寧に、通り道にいる人一人一人に挨拶をしながら通り過ぎていく。最終的に辿り着くのは俺の隣の席だ。

「おはようございます」

駐車場で挨拶したのに、わざわざもう一度挨拶をしてくれる。

「おはようございます」

俺も座ったままで小さく会釈しながら返事をした。本当にいい子だ。机の上にわざわざ仕事を乗せておくという、テロリストみたいな真似をする人とはえらい違いだ。そう思いながら牧谷さんのほうを見ると、なぜか彼女もこつちをみていた。しかも、軽くこつちを睨んでいるような気がする。何で？

きっかり十時、俺は牧谷さんに書類の束と、完成した書類を叩き返して休憩室に来ていた。

「あー、もう、朝から疲れた」

やる気の問題なのだろうが、朝はエンジンがかからない。そんなときに急ぎっぱい括りのついた仕事が終わってきたら、疲れようというもの。もう一日分のやる気を使ってしまった。自販機でカップのドリンクを買い、適当な椅子に座ってぼんやりしているところのまま就業時間が終わらないかなと思ってしまう。

ふと、ポケットの携帯電話が震えた。取り出してみるとメールが届いていた。映美からだ。

「ボス、夕飯は餃子が食べたいけど、何買ったらいいい？」

誰がボスか。さすがは近年まれに見る料理音痴。餃子の材料も分からないのか。つーか、何で 餃子？そもそも仕事中に何をやって

いるんだあいつは。まあ、俺もだけど。

『何餃子が食べたい？』

そう送り返してみると、すぐに返事が来た。

『えび餃子』

まためんどくさいものを。

『チルドでそれっぽいの買えば？』

『やだ、作って』

ええい、この我侭っ子めが。仕方なく俺は思いつくままに材料を書いて返信することにした。

『えび、豚肉、にら、白菜、餃子の皮。後はうちにあるもので何とかなるだろ』

『ラジャァー!!』

敬礼している姿が目には浮かぶような返信だな。昨日のパトレンジャーが頭に残っているのだろう。

そうか、今日は餃子か。久しぶりに手間のかかりそうなメニューだな。何とか定時で終わらせたいなあ。牧谷さんがいらぬ仕事を増やしませんように。

そんなことを考えながら、携帯電話を閉じると同時に、誰かが休憩室に入ってきた。

『お、サボり発見』

開口一番不愉快な発言をしてくれたのは、同期入社で一つ上のフロアにある営業課で働いている石原巧という大変いけ好かない友人だった。

『休憩だよ』

『何？またお局さんにいじめられた？』

お局さんは牧谷さんを指す。確かに影の権力者であるが。当人もそう呼ばれていることを知っているらしいが、当然面と向かっていうと怒る。石原はかなり気軽に言っているが、このフロアでそういう発言をすると、場合によっては手痛い目に合わされたりもする。

『そんなわけないだろう。仲良くやってるよ』

「へえ、そいつは凄いな」

「コーヒーを買いながら、からかうような口調で石原はそういった。確かに、今朝はどういうわけか朝一番から嫌がらせのような仕事を貰ったけど。基本的にはうまくやっているではなからうか。」

「まあ、なんだな、あの人が年下なら放っておかないんだけどな」

石原は見た目が良いだけに結構女性からの人気は高い。しかし、自分より年下しか興味がなく、範囲外の女性には見向きもしない。「相変わらず偏ってるなあ」

「まあ、お前のところの部署なら、立花さんかなあ」

「うちの部署なら…って、他の部署もチェックしてるのか？」

「ああ、まあ一通りな」

「うーん、恐るべし石原。これで実は結構仕事も出来るから人生は不公平だ。」

と、丁度そこへ件の立花さんが入ってきた。

「あのう、西田さんいらつしやいますか？」

「はいはい、いらつしやいますよ」

俺は片手を上げて返事をした。ほっとしたような表情を浮かべる立花さん。やっと見つけたって感じた。

「あ、立花さん。こないだの話、考えてくれた？」

「え、あ、あの…」

俺に用だったみたいなのだが、先に石原に捕まってしまった。こないだの話ってことは、どっかで声を掛けていたんだな。困っているじゃないか、立花さんが。

「いいじゃん、食事ぐらい。ご馳走するよ、ね？」

押し押せの石原にたじたじの立花さん。目線がちらちらとこっちに飛んでくるって事は、相当困っているのか、用事が急ぎなのか。多分両方だろう。

「可愛い後輩を妊娠させる気が馬鹿」

俺の言葉にぎよっとした表情を浮かべる立花さん。そりゃそうだ。

「お前、訴えるぞ」

振り向いて、鬼の形相で俺を睨みつける石原。その隙に立花さんが用件を伝えるべく口を開いた。

「あの、牧谷さんが探していました。どこだーって」

「え、怒ってた？」

「はい、少し」

「そりゃ、やべえ」

俺は慌てて残っていたドリンクを飲み干して、カップをゴミ箱にほうりこんだ。

「あーあ、お前の顔も見納めか。心配するな、同期として骨は拾ってやるから」

「うるせえ、コーヒで喉詰めて死ね」

形勢逆転とばかりに、けらけらと笑う石原に罵声を浴びせ、俺は休憩室を出た。立花さんもついてくる。その立花さんに石原が声を掛けてきた。

「立花さん、そいつと喋ると、梅毒になるよー」

「てめえ、いつかぶつ殺す」

立花さんの代わりに、愛のこもった返事を俺が返しておいた。何てこと言うんだ。みる、立花さんが大変困った顔をしているじゃないか。

「あの、助けに来てくれてありがとうございます」

少しうつむき加減に、小さめの声で立花さんがそう言った。

「え、ああ、どういたしまして。迷惑そうに見えたから。立花さんもはっきりいったほうが良いよ。アイツは諦め悪いから」

「あ、はい」

ぼつりと、やっぱりうつむき加減に立花さんは呟くように返事をした。基本的には、性格も穏やかで良い子なのだが、どこか危なっかしいところがある。俺は隣同士で入社当時からいろいろと接点が多いから、比較的普通に話してくれるようだが、石原のような強気の相手にはなす術もない。まあ、自分で気付いておいおい治していくしかないのだけだ。

そんなことを考えているうちに事務所についた。

「西田くん、待ってたわよ。あ、立花さんありがとう」

先に声を掛けられてしまった。何事もなかったように声を掛ける算段だったのに、イニシアチブを取られてしまおうとは、さすがは牧谷さん。

「今朝貰った書類なんだけど、ちよつと直して欲しくて」

はいはい、そんなことだろうと思いましたが。俺は腹を括って牧谷さんのデスクに近づいた。

「一応、赤で指示入れといたから、その通りにやってくれる？」

「はい」

差し出される書類の束。一番上のページが、既に全体的に赤く見えるんですけど。

「大至急でお願いね」

「はい」

大至急で仕上げて何に使うんだ、こんなもの。心の中でそういいつつ、書類を抱えてデスクに戻る。それからぱらと書類を見直してみると、本当に全体的に赤だらけだった。本当に細かい表現まで、逐一赤が入っている。一応どころか、どうにも悪意が感じられるのだが。まあやらねばなるまい。

「あの…どうぞ」

俺が一心不乱にキーボードを叩いていると、お茶の入った湯のみが机の上に置かれた。画面から目を離し、横を見ると、お盆を抱えた立花さんが立っていた。

「お客様に出したお茶、一回で捨てるのもつたいないから…。良かったら」

小声でそんなことを言ってくれた。ありがたい話ださっきのお礼のつもりなのだろうか。別に気にしてもらわなくても良かったのだが、まあ滅多に口に出来ない高級茶だ。ありがたく頂くとしよう。

「ありがとう、頂くよ」

俺がそういうと、立花さんは偉く照れたような顔で小走りに立ち

去って行った。早速一口頂こう。そう思った瞬間、なにやら射すような視線を感じた。慌てて周りを見回したが、こっちに視線を向けている人は見当たらない。牧谷さんも電卓を叩きながら、なにやら計算書と格闘しているようだ。…気のせいか。

その七

昼休み。会社の屋上にあるベンチに腰掛け、昼飯を食べるのが日課だ。メニユーも半ば決まっており、売店で買ったサンドイッチとコーヒーで殆ど済ませる。たまに新作の菓子パンなんかが出ていると、それが加わったりもするのだが、それほど大きな変化は無い。

正直に言えば、売店のサンドイッチなんて旨くも何とも無い。もう少しお金を出して、社員食堂で定食でも食べればもつとましなだろう。けど、昼の社員食堂は当然混む。辺鄙なところにある会社だから、誰も外へ食べに行こうなんて思わないのだ。貴重な昼休みは出来るだけ休みたい。そう考えると、食堂で席が空くのを待つよりも、こうして無人の屋上でパンを食べた方がスピーディーだ。

一食あたり三百円ぐらいとして、出勤日数の平均値で概算すると、月に六千六百円。二キロ入りの米袋が大体千円前後だから、月に換算すると約十三キロ分の予算がかかっていることになる。まあ、極端かつ無意味な計算だが、弁当を作ったほうが安いんだろうなと思わずにはいられない。

今よりも早起きすれば作れないことは無いと思うのだが、朝の一分は普段の一分の何倍も貴重なのだ。朝食も作らなきゃならないから、今も一人のときよりは早く起きるようになった。少しでも長く寢床にいるための必要経費だと思おう。

まとまりの無い考えを巡らせていると、屋上と屋内を繋いでいる鉄の扉が開く音がした。珍しいこともあるもんだ。そう思いつつそっちに目を向けると、その扉から出てきたのは立花さんだった。手に持っているのはハンカチ？ 俯き加減で、どこか元気が無い。

食べかけのサンドイッチを持ったまままで立花さんを見ると、彼女も俺に気付いたようでこっちをみた。

「あつ……」

眼鏡越しの瞳が、遠目からでも赤いのがわかった。一瞬、見つめ

あつような形になり、すぐに立花さんが目を逸らした。彼女は慌てて顔を背けて、踵を返し、屋上から立ち去ろうとした。

「ちよっと待ってよ」

その様子があまりにも痛々しくて、俺は思わず声を掛けてしまった。その声が届いたようで、こちらに背を向けたまま立ち止まる立花さん。

食べかけのサンドイッチをベンチの上において、彼女に近づいてみる。

「どうしたの？何かあった？」

「・・・ぐすっ」

振り返り、俺を見る瞳にじわりと涙が浮き上がり、ぼろぼろと流れ落ちる。ありゃ、泣き始めてしまった。

特に他の目線があるわけではないのだが、なれない状況にうっかりテンパッてしまった。

ど……どうしたら良いんだろう。必死で考えてみるものの、やはりこういうシチュエーションが初めてだということが分かっただけで、何のアイデアも出てこなかった。

「えーと、とりあえず座って」

座っていたベンチのところまで連れて行って、立花さんを座らせる。食べかけのサンドイッチをそのまま袋に放り込んで、俺もその隣に腰掛けた。

立花さんは、相変わらずすすり上げている。

映美なら飴玉でも渡せば機嫌が直るのだけど、多分普通はそうじゃないんだろう。一般女性の平均値から大きく離れた彼女を持っていくと、こういつときの対処がからつきしになる。何か……うーん、落ち着いてもらおうと良いんだろうな。

「はい、良かったらどうぞ」

売店で買った缶コーヒーを彼女に渡してみた。まだ手付かずだ。

カフェ・オ・レなので、苦すぎると言うことも無いと思うんだけど。

「あ……ありがとうございます……」

彼女はそれを受け取ってくれた。そのまま手で弄んでいる。嫌いだったかな？でも、少し落ち着いたように見えたので、とりあえず話しかけてみた。

「んで、どうしたの？」

「実は……ぐすっ」

何なんだろう、また泣き始めてしまった。そのまま、また喋れなくなる。その立花さんを見てみると、とても辛いことがあったのだろうと思わせられ、胸が痛む。

俺の視線の先で、立花さんはぐしぐしと泣き続けている。このままでは、昼休みが終わってしまうのではなかるうか。何とか、話を聞いてあげたいんだけど。しかし、なんと話しかけたものか。

情け無い話だが、完全に俺はうろたえていた。そうして、おろおろしつつも無言の時間が過ぎていく。まさに空回り。

そして、先に口を開いたのは、あるう事が立花さんのほうだった。

「あの、このまま……じゃ、休み時間、終わっちゃうし、後で……お話して……いい……ですか？お化粧も……直さなくちゃ」

立花さんは眼鏡を外してハンカチで目を押さえながら、たどたどしくそう言った。そうか、女の子にはそういうのもあるんだな。

「うん、わかった。じゃあ、落ち着いたらいつでも」

そういうのが精一杯。情けないっただけ無い。

立ち上がった立花さんは、弱々しい笑みを浮かべて、軽く会釈してから立ち去って行った。残された俺は、とりあえず残ったサンドイッチをやるせなさと共に嚙締めるしかなかった。渴き始めたパンが喉に引っかかる。ああ、コーヒーは立花さんに上げたんだった。ちよつとやばいかも。

俺は苦しい喉に咳き込みながら、慌てて屋上を後にした。

やれやれ、なんて昼休みだろう。んぐぐ……水、水。

その八

休憩室でコーヒーを買い、それでどうにか喉の引つ掛かりをとったところで、昼休みが終わった。結局、立花さんはなんだったんだろ。すっきりしないまま、事務所に戻ると、既に立花さんは事務所に戻っていた。

隣に座るときに、何となく立花さんの横顔に目を向けてみる。目が少し赤いような気がしたが、他は普段と変わらないみたい。凄いなあ。

感心していると、不意に立花さんがこっちを向いた。口の形だけで「ありがとうございます」と言っ、ぺこりと小さく会釈。何をしたという実感も無いけど、とりあえず俺も軽く頷いておいた。多分俺は今、中途半端な顔をしているんだろうなあ……。

「西田くーん」

おかしなテンションで俺を呼んだのは、牧谷さんだった。漠然と駆け抜ける嫌な予感。

「なんか、不味いところありましたか？」

きつとさっきの書類のことだろう。そう思っ、先手を仕掛けてみる。

「うっん」

首を左右に振る牧谷さん。くっ、また負けた。

「あのね、私ちよつと銀行に行って来るから。一時間ぐらい」

「はあ、そうですか」

とまあ気の無い返事してみたものの、これはチャンス。

「サボっちゃ駄目よ」

「はい」

と、釘の刺さったふりをしておく。

席に戻った俺は、書き物をするふりをしてメモ用紙に用件を書く。牧谷さんが荷物を片手に事務所を出て行くのを見送り、そのメモを

立花さんの机の上に乗せる。

「話を聞くので、休憩室まで。俺の後で」

そう書いておいた。文面を読んで小さく立花さんが頷いたのを確認して、俺は事務所をさりげなく出て行った。

休憩室は幸いにも空だった。中に入り、コーヒーを自販機で買って適当な椅子に座る。五分ほどで立花さんもやってきた。彼女は僕の隣に腰掛けた。

「んで、何があったの？」

俺は早速切り出した。時間はそうあるものでもない。

「実は、西田さんにお茶を出していたのを牧谷さんに見られたらしくて、お客様用のお茶は社内の人に出しちゃ駄目だって、物凄く怒られちゃって。まるで一事が万事適当にやっているように言われたもので、すごくシヨックで……」

ああ、しまった。俺の心の中に後悔が渦巻き始めた。これは、Oしさん同士の確執に首を突っ込んでしまったのではないだろうか。いや、可愛い後輩だとは思っただけど、これならまだ石原がしつつくて、と言う話の方が良かったなあ。だって、あいつを殴れば良いんだもの。

「ちよつと前からそうなんです。何だかすごく厳しくなっちゃって私、牧谷さんに嫌われているんでしょうか」

知りません。知りたくありません。

「もし嫌われていて、今より酷い仕打ちを受けるようになったら、私あそこでやっていく自信がありません」

「うーん、立花さんも入社して一年を過ぎたから、牧谷さんも少し締め付けを厳しくし始めただけじゃないの？」

「そうでしょうか……」

「うん、あれで結構神経質だからさ。細かいところまで気がついちゃうんだよ。本人は良かれと思って言っているのかも知れないし」

とまあ、取り立てて裏づけの無い憶測を並べてみたり。神経質な

のは本当だけど。

「だからさ、試しに立花さんのほうから、もう少し接してみたらどうかな。悩み事も俺じゃなくて牧谷さんに言ってみるとか」

「はあ……」

釈然としていないみたいだ。そりゃそうだろう。嫌われていると思っっている人間に、積極的に接していくなんて、なかなか出来ることじゃないと思うし。

「最近忙しいみたいだし、心のゆとりがなくなりかけてるところもあるかも。もう少し、様子を見てみたら」

「でも、我慢できるか、自信ないです」

「うーん、また耐えられなくなったら話ぐらい聞きましょう」

「本当ですか？」

ずいっと身を乗り出してくる立花さん。俺はちょっとのけぞりながら頷いた。

「わかりました。じゃあ、頑張ってみます」

何だか良くわからないが、ちょっと立ち直ってくれたらしい。

「うん、頑張つて」

せつかくの後輩だから、先に辞めてしまつと寂しいし。何より、俺の仕事がまた増える。

「それでは、先に戻っていますね」

何やら元気になった立花さんはそう言つて、さっきまでとは打つて変わつて軽い足取りで休憩室を出て行った。なんだか、良くわからないなあ。

とにかく、どつと疲れた。俺はもう少し休んでいくことにした。

それから午後を無事に乗り切つた俺は、定時に帰途につくことが出来た。

餃子は手間がかかる。タダでさえ、腹が減つたと騒ぎ立てる映美は煩いのに、これで帰るのが遅くなった日には、手が付けられない。幸い道も空いている。順調にアクセルを踏んでいると、携帯電話

が胸ポケットで震えた。取り出してみると、映美からだった。なんじやらほい。さすがに、まだ家には着いていないはずだけど。

開いてみると、タイトルには「ミッション01」と書かれていた。また、しょうもないメールだな。

「アイスを買った。コンビニでハーゲンを買ってきた。え」

……。無言になってしまった。メーカーまで指定かよ。高いよ。そう思いつつも、買って返らないと何を言われるか分かったものじゃないので、速やかにコンビニに向かうことにした。

青い看板のコンビニに入り、ハーゲンダッツのカップアイスをつかごに放り込む。これだけで、スーパーカップなら四つ買える。うーん、そう考えると高いね。まあ、確かに美味しいけど。

ついでに、パックの安いお茶を一本買って店を出た。夕方とはいえ、随分と暖かくなってきた。休日に出かけるにはもってこいなんだけどな。映美と居ると、本当にインドアになる。たまに出かけるといえばヒーローショーでは、腰もなかなか上げる気にならないし。まあ、ビデオ屋に行くのが精々か。

少し虚しい風が胸を通り抜けた。
帰る。

その九

駐車場に車を止めながらアパートを見上げると、既に俺の部屋には電気がついていた。どうやらもう映美は帰っているらしい。さすがに帰る時間はまちまちなので、帰りは駅からバスに乗ってもらっている。

階段を二階まで上がり、部屋までの廊下を歩いていると、けたたましい笑い声が聞こえた。この笑い袋のボリウムを上げたような馬鹿っぽい声は映美だな。ついに頭の線が切れたかな。

「ただいまー」

ドアを開けると同時に、黒い影が飛び掛ってきた。

「ちえすとー」

パカンと軽い音がして、頭に衝撃が走る。

「いてっ」

「ふふふ、パトロッド真つ向一文字切り」

新聞を丸めた「パトロッド」を手に、意味の分からないポーズを決めているのは、もちろん映美だ。何故帰ってくるなり、しかもわざわざコンビニに寄ってあげた彼氏に対して暴力を振るうのか。そのあたりは大変に聞きたいので、むんずと襟首をつかむ。

「にゃーっ!!」

奇声を上げる映美。ネコか。

「何のつもりだ」

「まさか……、パトロッドが、通用しない……」

ほう、続けるか。取り急ぎ、襟首をつかんでいた腕を引き寄せてみる。

「みゃー!!」

ネコかって。

「何・の・つ・も・り・だ・?」

女性に対しては丁寧。紳士のたしなみと言う奴だ。

「た、たすけてえ、ピンク」

ほほう、助けを呼ぶ元気がまだあるか。って助け？ふと足元を見ると、見慣れない靴が一足あった。誰か来てるのか？

「あー、お邪魔しています」

「由香ちゃん!？」

おずおずと、部屋のほうから顔を覗かせたのは、焼きそば屋さんの売り子ちゃん改め、映美の後輩の木下由香ちゃんだった。

映美と付き合うようになってから、ちょこちょこ会うようになった。初めのころに感じたお喋りで明るいという印象そのままの子だった。

「ピンク、親しげに話している場合じゃないわよ。こいつは地球人の振りをした、アクリアンなんだから!!」

ちよつと黙れ。誰がアクリアンか。由香ちゃんが困ったように笑っているじゃないか。ちなみに、アクリアンはパトレンジャーに登場した悪い宇宙人達のことである。

「改めて、何のつもりだ？」

「ピンク、今しかないわ。私ごと貰いてえ。彼を呪縛から解放つのお!!」

「え、ええつと……」

よく見れば、由香ちゃんの手にも丸めた新聞が握られていた。この、見た目と心がちびっ子に付き合ってくれていたのかと思うと、申し訳なくて涙が出そうになるな。

「人の話を聞け。買ってきたハーゲンダッツを、俺と由香ちゃんですら平らげても良いんだぞ」

ハーゲンダッツの入った袋を映美に見せながら俺がさういって、不思議なぐらいにびたりと黙った。この手は使えるな。

「うっ……」

襟首をつかまれたまま、肩越しに俺を見上げる映美。あ、ちよつと泣いてる。そんなに？

「だって、退屈だったんだもん。おなかも減ったし」

「暴れたら、余計に腹が減るだろうが」

ぶん、と拗ねたようにそっぽを向く映美。俺はため息を一つついて、とりあえず襟首を離してやった。

「まあ、いいや、それじゃ大急ぎで作るから、少しだけおとなしくしててくれ」

「はい」

つまらなそうに返事をする映美。昔、三十歳ってのはすごく大人だと思っていた時期があったけど、どうやら完全に思い違いだったようだ。

「それにしても、由香ちゃん御免ね。わざわざ来てくれたのに、あんなので」

「いえ、私も先輩に会えるのは嬉しいので」

「そう言っつて貰えると、嬉しいけどね。まあ、ご飯食べていってよ」

「あ、ご馳走様です」
ぺこりと頭を下げてくる。うちのちびっ子に比べて、なんて大人なんだろう。

初めて会ったときに学生だった由香ちゃんも、今年から社会人だ。まだ五月だとしたら、会社に慣れていないだろうし、実はしんどいんじゃないのかなあ。いつもなら、もつとはきはき喋っているような気もするし。

俺と一緒に、実家に帰るのを面倒臭がってこっちで就職してしまつたくちなので、住んでいるところは変わっていないらしい。自転車で、多分二十分ぐらいだろうか。

冷蔵庫の中には、ちゃんと俺が指示した材料が入っていた。よっぽど食べたかったのだろう、珍しく買い忘れや買い間違いはないようだった。

ポウルにひき肉と、荒微塵にした海老、それから細かく切った蕪や調味料を放り込む。白菜は軽く下茹でしてから、やっぱりみじん切りにしていく。

「由香ちゃん、なんか見る？」

映美の声が聞こえた。どうせ、映美ちゃんコレクションだろう。疲れている人間に見せるものではないような気がしたが、止めて止まるものでもないしな。ごめん、由香ちゃん。

「あ、お任せしますよー」

ふむ、やっぱりいつもより静かだ。由香ちゃんの声には何だか張りもないようだった。

「……由香ちゃん、元気無いね」

「そう、ですか？」

「うん。パトレンジャーごっこじゃ、駄目かー」

はあ？あれは元気付けようとしてやっていたのか？駄目に決まっていると思うが。どういう思考回路の繋がり方をしているんだかそれにしても、単にはしゃいで由香ちゃんを巻き込んでいたわけじゃないんだな。俺は、ちょっとだけ映美を見直した。

「仕事？話なら聞くよ。こう見えてもOLの先輩なんだからさ」

「あ、はい……」

少し静かになった。

切った白菜も混ぜて餡は完成。冷蔵庫から餃子の皮を取り出し、餡をちよいちよいと包んでいく。餃子作りの中では、かなり楽しい工程だと思う。

「実は、仕事で失敗しちゃいましてね。ちょっときつく怒られたものだから」

お、話が再会した。俺は、手元で餃子を作りつつ、二人の話に耳を傾けた。

「私、やっていけるのかなーって」

あー、それはきつと、誰もが通る道だね。なれぬ空間の中で起こす初めての失敗は、意外と心に押し掛かってくるものだ。

「大丈夫だよ。大丈夫。全然平気。余裕」

ポジティブな単語を並べて見せる映美。そんなに強調しなくて良いとは思うけど、確かにその通りだ。

「まだ入社したばかりなんだから。怒られるのは、由香ちゃんがちゃんと気付ける子になって欲しいからだよ。だから、次から気をつければいいの。向いてるかどうかなんて、分かるのはもっと後。今は、がむしゃらに頑張るときだよ？」

そうそう。向こうからは見えていないけど、頷いて俺も同意しつつ、最後の一つを包み上げた。

「先輩……」

「よしよし、不安だよな。新しいところで一人で、でも、大丈夫だからね」

え、映美が慰めている……。突然、隣の部屋が異世界になったような錯覚を覚えた。頭を撫でられることはあっても、撫でる側に回るなんて。それより何より、ちゃんと年上らしいこと、出来るんだ。何もかもがあまりにも新鮮で、そして俺の積み上げてきた映美像からは違いすぎていたので、びっくりがおさまらない。

けど、何となく誇らしかった。俺の目は、狂っていなかったような気がする。

由香ちゃんが泣き始めたみたいだったので、その声が聞こえないように俺は餃子を焼き始めた。

その十

「餃子が焼けたよー」

そう言いながら、俺が部屋に戻る頃には、二人は楽しそうに喋っていた。

「おー、待ちかねたー」

「わ、凄い。美味しそう」

そそくさと、大皿を置いたコタツの周りに近寄ってくる二人。俺はそれぞれの前に小皿と割り箸を置いてやった。醤油、酢、ラー油は自力で混ぜるのが西田流。

「さ、召し上がれ」

「いったただつきまーす!」

猛然と大皿に箸を伸ばす映美。

「頂きます」

それに少し遅れて、由香ちゃんも箸を大皿に持っていく。

今日のは割りと自信作だ。皮もパリッと焼けたし、豚肉、海老、野菜類の配合もばっちりだと思う。

「どうかな?」

尋ねてみると、映美は手で大きな丸を作ってくれた。口の中には餃子が詰まっっていてしべれないようだ。そんだけがつついてくれると、見ているほうも嬉しい。

「美味しいですよ、西田さん。料理上手ですねえ」

由香ちゃんも、ニコニコしながらそう言ってくれた。

「一人暮らし長いからね。コンビニも飽きるし」

「ふひのふふひゃんのひよふおひふあへはいいひひよ」

何かこう褒めてくれているのだろう。何を言っているかはさっぱり分からないが。てゆーか、詰め込みすぎだろ。

「先輩、何を言っているのやらさっぱりですよ」

「まっただ。とうとう日本語すら喋れなくなっただか」

「ふあふあふあ〜」

入れ歯をなくしたおじいちゃんか！眉をひそめて、恐らく俺の発言に何か抗議しようとしたようではあるが、ハムスターのように膨らんだほっぺたがそれを邪魔している。

「ま、いいや。ほっところ」

「ふむー！！」

良いから飲み込め、アンポンタン。

「何やら抗議しているように見えるんですが？」

「うん、彼女の日本語が不自由なのは、いつものことなんだ。そっ
としておいてあげて」

ガンと音が響いて、頭に衝撃が走った。おお、星が見える。

絨毯の上に重たい音を立てて落ちたのは、ビデオのリモコンだった。命中箇所、進入角度から発射地点を割り出してみると、計算するまでもなく映美だ。投げ終えたフォームのままで、こつちを睨んでいる。さっきのお姉さんの態度はどこへ行ったのやら。

「いてえよ」

「……………むぐ……………自業自得だもん」

やっと飲み込めたらしく、映美の口からはちゃんとした日本語が飛び出してきた。ふいと顔を背ける映美。由香ちゃんが困ったような笑顔を浮かべている。確かに、こんな暴力の現場を見せられては、怯えるのも無理はない。

「ほらみる、お前の凶悪な本性に、由香ちゃんが怯えているじゃないか」

「違うもん。祐君が馬鹿だから呆れてるのよね？」

「え…、いや、あの…、どっちも、かなあ……………」

困ったようにしつつも、本音をさらっと口にするのは由香ちゃんの良いところであり、悪いところだ。

夕食後、少しだけ喋って由香ちゃんは帰ると言った。明日も仕事だから、早めに休むらしい。映美と一緒に戦隊物のDVDを見たか

ったようだ。是非とも次回にきなさいという俺の説得に、珍しくあつさり応じたのは、由香ちゃんに対する先輩としての姿を意識したからだろう。そんなものは今日のやり取りでとっくに地に落ちていると言うのに。まあ、それで聞き分けが良くなるなら、無理に知らせてやることもないか。

「途中まで送っていくよ」

「え、悪いですよ」

「いいよお。遅くなっちゃったし」

俺より先にそう言ったのは映美だ。お前は部屋でごろごろしているだけだろうが。まあ、俺も同じことを言っつもりだったからいいけど。

「危ない奴がいなくても限らないから。ね？」

「あ、それじゃ……途中までだけ。お願いします」

「うん。じゃあ祐君よろしくー」

そう言っつて、映美はパタパタと手を振った。ああ、やっぱりいつてくるつもりは無いらしい。

由香ちゃんは自転車で来ていた。それをころころと押しながら、並んで夜道を歩く。部屋の中は結構暑かったらしく、外の風は肌心地良かった。

「どうもすいません」

「ああ、気にしないで。腹ごなしの散歩には丁度良いしね」

くすつと由香ちゃんが笑った。

「それにしても、先輩はいい人を見つけたんですね」

しみじみ、と言う調子で由香ちゃんがそういった。

「あんなに楽しそうで、生き生きとした先輩は久しぶりに見ました」

「そうなの？」

まあ、さっきの大人びた態度を見ると、大学の後輩には先輩として頑張っつて接しようとしていたのかもしれないな。

「よっほど居心地がいいんですねえ。パトレンジャーごっこか、

大学のときはしてなかったなあ」

「それは、幼児退行しているってこと？」

年々ガキっぽくなっていったら嫌だなあ。ますます手におえなくなる。

「うーん、と言うよりはリラックスしているんでしょうね。多分元々はあんな人なんじゃないかな。大学のときもちらほらと子供っぽいところ、あったし」

「振り回されっぱなしだけどね」

「それだけ伸び伸びしてるってことですよ」

されるほうは、結構大変なんだけどね。由香ちゃんの嬉しそうな顔を見ていると、それは言わないほうが良いような気がしたので、口を閉ざしたけど。

「戦隊物のテレビ見て、戦隊物のビデオ借りて、映画を見に行つてこの間はヒーローショーにも行つたよ。車の中でも、ヒーローソング三昧。たまには、普通のデートを試してみたいと思うけどね」

「大変ですねえ」

由香ちゃんは、まるつきりそんなことを思っていない口調で同意してくれた。ありがとう。救われるよ。

「ほんとにね」

つい、ため息。

「先輩を泣かしたりしたら駄目ですよ？」

突然、そんなことを言われた。由香ちゃんのほうを見たら、ちょっとだけ顔がマジだ。

「泣き虫だからなあ」

「そういう意味ではないです。分かっていると思いますけど」

釘を刺された、とはこのことだろう。それにしても、ぶっとい釘だこと。

「私は、先輩の味方ですからね」

何を今更。俺は苦笑を浮かべることしかできなかつた。

「あ、そうだ、これを先輩に渡そうと思っていたんです。相談に乗

ってもらってたら忘れてた」

そう言いながら、由香ちゃんは自転車のかごに入れた鞆の中から、紙切れを一枚取り出した。

「今度、大学で後輩たちが映像研究会主催の講演会をやるんです。樹木希さんが来てくれるんで、先輩が来たがるかと思って」

そう言いながら渡してくれた紙切れはチラシだった。ついこの間ドラマで見た樹木希が笑顔で写っている。

「へえ、これは絶対に行くだろうな」

「そう思います。来月頭の土曜日なんですよ。良かつたら、西田さんも一緒にどうぞ」

にっこり笑う由香ちゃんの顔には、ついてくるんでしょう？と書いてあった。ついてくる、と言うよりは、連れて行かれるんだけどね。「ありがとう。渡しておくよ」

「はい、よろしくお願いします。あ、それじゃ、ここまでで大丈夫ですから。あんまり遅くなって、先輩に心配されても困りますから」「そんな奴じゃないけどね」

「そんなことは無いです」

由香ちゃんはきっぱりとそう言い切った。随分と肩を持つ。まあ、後輩だし、当然か。

「先輩と、同じ時間を大切にしてあげてくださいね」

「……ああ、出来るだけね」

俺の返事に、由香ちゃんは少し不満そうだった。俺としては、精一杯の返答なんだけど。

由香ちゃんは、すぐに表情を笑顔に戻して自転車にまたがった。

「それじゃあ、また。おやすみなさい」

「はい、お休み」

由香ちゃんは後ろ手に手を振りながら、自転車に乗って颯爽と去っていった。俺は、その背中が小さくなってからもう一回チラシを見てみた。映美は喜ぶだろうな。けど……。

その十一

「ただいまー」

部屋に帰ると、部屋の中は静まり返っていた。見れば、布団の上に横たわる映美の姿。着の身着のまま、気持ちよさそうに寝息を立てている。何をやっているんだか。往復で、多分三十分もかかってないぞ？コタツの上には晩飯の跡が残ったままだ。まあ、下手に片付けさせると皿を割る可能性もあるため、あまり無理も言えないが。

空になった皿をキッチンに運び、流しで洗いながらさっきの由香ちゃんの言ったことを思い出す。

「泣かしたら駄目ですよー……か」

俺だつて泣かしたいなんて思わない。あのちびっ子は可愛いと思うし、いろいろとやって上げられる自信だつてあるはずだ。

「同じ時間を大切にしてくださいね」とも言っていたなあ。

……してるさ。こうして一緒に暮らして、同じ時間を過ごしている。分からないのは、仕事している間ぐらいじゃないか。

由香ちゃんは何が不満なのだろうか。俺は精一杯やっている。これはきつと、胸を張って言えることだと思う。

「……ん、祐君、帰った？」

眠たそうな声。部屋のほうを見ると、映美が起き上がっていた。

目をこすりながら、大あくびをしている。洗い物の音で目が覚めたらしい。

「おう、帰ってるぞ」

「うん。由香ちゃん、ありがとね」

こつちを振り向いて、かくんと頭を下げる。送っていったことを言っているのだろう。別に気にしなくても良いんだけど。どうでも良いけど、絵に描いたように寝ぼけてるな。

「ああ、それより、着替えるよ。シャワー浴びて、歯も磨いてから

寝るよ」

「ふあい」

という返事と同時に、ぽふっと言う音がした。見れば、うつ伏せになって再び横たわる映美の姿。

「だから、寝るなって」

「んー、眠いよう。明日にするう」

「虫歯になるだろ！？とつと起きて風呂場に行け！！」

全く、何から何まで、どうしてこいつは……。言っても始まらないけど、言わずにはおれない定番の愚痴だな。

俺は最後の皿のゆすぎを終わらせ、蛇口を閉めた。それから手を拭いて部屋で寝ている映美の横に膝を着く。視線の先には映美の横顔。

「お・き・ろ」

耳元で言つと、うざったそうに眉をしかめ、もそもそと蒲団の下のほうに移動しようとする。

「うー、……いいよお」

「良くない！！化粧もどうせ落としてないんだろ。肌が荒れるぞ」

「へーきー……」

……女性として、その発言はいかなものか。こうなってしまうと、なかなか起き上がらない。仕方がない。由香ちゃんに貰ったチラシを使うか。

「映美。由香ちゃんに聞いたんだけど、大学に樹木希が来るらしいぞ」

と言いながら、映美の顔のそばでパラパラとチラシを振ってみる。「えっ！？ホントツ！？」

ばね仕掛けの人形のように、頭をびよこんと起こす映美。すぐに体も起こして、俺の膝元に這い寄ってきた。それを見ると、なんだか寂しくなってしまった。いや、効果があるだろうとは思ったけど。「いついつ？いつくるの？」

俺の持っているチラシを覗き込む映美の目は、さっきまでの眠た

気な様子とは比べ物にならないほどに輝いている。

「来月の頭の土曜日だってさ。んーと、学生会館の小ホールだって」
「みせて」

映美が俺の手からチラシを引つ手繰ろうとした。

「とりあえず、風呂は入って来い。あと、歯磨きも」

頭上で手を伸ばしてしまえば、映美はどうあがこうと届かない。

「えー、後で良いよお」

ぴよんぴよんとジャンプしつつ、唇を尖らせる映美。

「駄目。紙飛行機にして窓から発進させるぞ？」

手を上げたままで、窓辺まで移動すると、流石に映美の顔が引きつった。

「わあ、ダメダメえ」

バタバタと、慌てて引き出しから着替えを引つ張り出し、風呂場へと駆けていく映美。本気で飛ばすわけではないのだが、俺の気持ちを感じ取ってくれた様で何よりだ。

十分もかからず、映美は再び部屋に戻ってきた。鳥の行水とはこのことだ。

「早いな。ちゃんと耳の後ろとか洗ったか？」

「むー、なによう、お母さんみたいでやな感じ」

そうでもしないと、映美はすぐに身だしなみを整えなくなるからな。別に言いたくも言ってるわけじゃない。……本当に保護者みただ。まだ、こんなでっかい子供のいる年じゃないんですけど。

「ねー、チラシー」

「はいはい」

映美にチラシを渡すと、早速食い入るように見始めた。

「んじゃ、俺もシャワー浴びてくるか」

「うん、いつてらっしゃーい」

チラシに目を落としたまま、パタパタと俺がいるのとは反対方向に手を振る映美。完全に入り込んでしまったようだ。まあ、おとな

しいから良いか。そう思いつつ、俺は着替えを持って風呂場に行った。

服を脱いで、中に入って俺は目を見張った。鏡も、風呂場の壁も泡だらけ。シャンプーだかボディソープだか知らないが、どう洗ったらこうなるんだ。怒鳴りつけて呼びたいところだけど、どうせチラシに夢中でこっちにはこないだろう。おざなりに「はい」とか返事されてもムカつくしな。

俺は取り急ぎ深いため息を一つついて、シャワーでその辺の泡を洗い落とすことから始めた。

……何と言うか、面白くないなあ。

風呂場から出ると、映美はまだチラシを眺めていた。やれやれ、嬉しそうな顔しやがって。その顔を見ていると何だかさっきの面白くない気分が戻ってきた。やっぱり泡の件は一言言っておくか。部屋に戻った俺は、映美に声を掛けた。

「映美」

「ねー、祐君」

恐ろしいまでに同時。ここは気が合わなくても良かったなあ。

「何？」

とりあえず、映美に話す権利を譲ることにした。きつとどうでもいい事を言い出すに違いない。「そんなことよりなあ」で話を一刀両断にしてから、説教タイムに突入してくれる。

そんなダークなシミュレートをしながら、映美の言葉に耳を向けてみた。

「これ、一緒に行こうね」

映美はそう言って、さっきのチラシを見せてくれた。珍しくこっちをじつと見つめながら、そう言う彼女の仕草は何やら小動物を連想させられ、あまりに眩しかった。思わず心がよるめいた自分がいる。

「お、おう」

全くもって不覚なことに、このときの俺はやや照れていた。

「へへ、約束ね」

嬉しそうに映美が笑った。俺も釣られてなんとなく笑った。泡のことは頭から消し飛んだ。

「で、祐君は何？」

「うん？ああ、なんでもないよ」

俺はそのまま笑ってそういった。映美は不思議そうに首を傾げた
が、すぐにどうでもよくなったらしく、俺と一緒に暫く笑っていた。

その十二

翌日から、映美がおかしくなった。いや、おかしいのはいつものことなのだが、ワクワクとソワソワが止まらなくなったらしく、いつも以上に落ち着きが無くなった。カレンダーを見ては指折り数え、暇があればチラシを眺めている。よっぽど樹木希を見られるのが嬉しいのだろう。その予習についても入念だった。

夕飯時には必ずパトレンジャーのDVD上映会となり、俺が学生時代にバイトを一生懸命して買ったコンポは、パトレンジャーボーカルアルバム再生装置と化した。樹木希の歌声は、上手くも無く下手でもない。歌詞もありきたりで、インパクトに欠けるのだけど、数十回聞けば覚えるものだなあ。門前の小僧のなんとやらだ。

飯の手を止めて、DVDをぼんやりと眺める映美の目は何とも言えない危なっかしさがあつた。心ここにあらずとは、今の映美の状態をさすのだろう。

ただまあ、今までに比べると静かになった。そわそわしているものの、喚き散らすでもなく、理不尽な我俣に振り回されることも無い。視界をちよるちよるされるのは邪魔臭いが、それぐらいを我慢するのは何でもなかった。

そうだった次第で、俺も心労の少ない快適な日々を送ることが出来るなと思っていた。

そんなある日のことだ。昼休み、俺はいつもどおり屋上で昼食を取っていた。丁度食後のコーヒーを飲み終え、満足しつつ携帯をいじくっていると、鉄の扉が開く音がした。屋上に姿を見せたのは立花さんだ。

「あ、やっぱりいましたね」

どうやら目的は俺らしい。面倒臭い予感がして、俺は心の中で軽いため息をついた。

「うん。昼飯はここで食べることにしているからね」

「寂しくないですか？誰もいなくて」

だから良いんだけどね。俺が心静かに過ごせるのは、寝ているときとここで休んでいるときだけだ。映美はあんまり寝相が良くないので、寝ていても時として静かでなくなることもあるし。

「まあ、もともと静かな方が好きだし」

「そうなんですか。確かに、天気の良い日とかは気持ち良さそうですね。私もここで食べてみようかな？」

是非とも止めてくれ。立花さんのことは別に嫌いじゃないけど、昼休みが騒がしくなるのは御免だ。

「結構風が吹いたりするから、気をつけないと昼ごはんが埃だらけになるけどね」

とかなんとか。それにしても、結局君は何の用？

「で、俺に何か用だった？」

「ああ、はい。そうでした。実は、ご相談したいことがあるんです。うわあ。この間の悩み事が頭の中でフラッシュして、瞬間的に軽い眩暈を覚えてしまった。

「今度は、何？」

「それがですね、少し長くなりそうなので、出来ればご飯でも食べながら聞いて貰えればと……。どうでしょう？」

どうでしょう、と来たか。うーん、気が進まないけどねえ。映美もほったらかしには出来ないし。

「いつぐらい？」

俺の質問に、嬉々とした表情で小さな手帳を取り出して開く立花さん。

「えーとですね……。今週末の金曜日とか」

「うーん、ちょっと厳しいかなあ。今月は色々忙しくて……」

適当に濁してみる。まあ、映美に振り回されるだろうから、忙しいといえそうなんだけど。

「……そうですか。また、都合の良さそうな日があれば、教えてく

ださい」

立花さんは落胆したように手帳を閉じた。

「うん、ごめんね」

苦笑い。

「それでは、お昼休みに失礼しました」

ぺこりと、軽く一礼して立花さんは屋上を出て行った。

やれやれ、俺は一つ息をついて、それからちよつと空を見上げた。今日も良い天気だ。携帯の時計を見ると、あと三十分ぐらいしか昼休みが無いことが分かった。せめて三十分、ゆっくり出来ますように。

そう祈った矢先だった。

「お、なんだお前がいたのか」

そついいながら屋上に現れたのは、事もあるうに石原だった。

「俺の聖域に入ってくるな。休憩室でコーヒーでも飲んでろ」

「……誰がお前のだよ」

呆れ気味の石原。しかし、静けさを勝ち取るためには、奴がいては邪魔なのだ。

「うるせえ。昼休みは静かに過ごすことにしてるんだよ。屋上は立ち入り禁止だ」

「立花さんは良いのに？」

げっ、見たたのか？

「いや、あれはちよつと相談を受けていたというかな……」

俺の言葉を聞いて、石原は厭らしい笑い顔になった。大変醜く、罪にならないなら殴っているところだが。

「やっぱり屋上にきてたのか。いや、たまたま立花さんを階段の近くで見かけたんだ。声を掛けようと思っただけで、なんだか落胆したようなため息をついててさ。何かあるのかと思つて、試しに上がつてきてみただけなんだ」

し、しまったあ。引っ掛け問題かっ！？いや違つっ！！思わず心の中で乗り突っ込みしてしまった。くだらない技を身につけやがっ

て。悔しいが後の祭りとはこのことだ。

「まあ、なんとというか、こういうのってどうなんだろうな」

「何がだよ？」

そういった俺の顔を出版社の人間が見れば、きつと「苦虫を噛み潰す」の項目に例示として写真を載せたがったことだろう。自分でもはつきり自覚できる程度に、俺は感情を表に出していた。

「ほら、同期との友情を蔑ろにしてさあ、後輩の女の子を特別に可愛がるようなのってさ」

「言い方を変えろ。お前がそんなことを言つと卑猥に聞こえる」

「卑猥でないと？」

「ないよ」

何を言っているんだか、この慢性発情男は。

「まあ、卑猥でないとしてもだ」

「しても？」

「俺も寂しくて、牧谷さんに相談してしまつぐらいのことはしてしまつかもしれないわけで」

何たる露骨な脅迫。今すぐ堅いものが振ってきて死ぬ！！俺の視線に物理的な破壊力があれば、いけ好かないこのにやけ虫を四散させてやるところだ。しかし、現実になんかそんなことはなく、どうやら俺のそんな視線は奴に勝算ありと踏ませてしまったらしい。

「立花さんと一緒に食事が出来たら、あるいはそれを忘れてしまつかもしれないが」

こんなことを言い出した。石原は、さも楽しそうにそっくり残して、それから不愉快極まりないことに俺の肩をぼんぼんと二度叩いて、屋上から去っていった。

一人きりになった屋上で、俺は呆然としていた。最悪のタイミングが綺麗に重なつたといつても良いだろう。どういふわけか知らないが、最近俺は牧谷さんに睨まれているみたいだ。そこへ石原の口から牧谷さんの耳にそんな噂が入った日には、どんな目に合わされるやら、考えただけでもゾツとする。何しろ、牧谷さんはこの会社で、

恐らく唯一俺に彼女がいることを知っている人だ。それを止めるためには、石原の馬鹿と立花さんが食事する席をセッティングしなかりゃならないとは……。

昼休みの終了を告げる鐘が鳴った。俺は同時に俺は大きなため息をつき、それから重たい足を引きずるようにして屋上を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568c/>

戦えラブレンジャー

2010年10月15日21時40分発行